

『広島市被爆 70 年史 ーあの日まで そして、あの日から 1945 年 8 月 6 日ー』の刊行をふりかえって

広島市公文書館
被爆 70 年史編修研究会事務局員 岡 崎 伸 子

2018 年 7 月 28 日、『広島市被爆 70 年史 ーあの日まで そして、あの日から 1945 年 8 月 6 日ー』が刊行された。被爆 70 周年記念として取り組んだ本事業は、広島市として実に 20 年ぶりとなる市史編さんであった。平成 26 年度から 4 年間の計画は予定より半年ほどずれ込んだものの、なんとか無事に刊行することができた。

約 20 年前に刊行された『被爆 50 周年図説戦後広島市史 街と暮らしの 50 年』は、その名が示す通り、写真や図表をふんだんに使って市民の戦後 50 年の生活を振り返るものであった。感覚的にわかりやすく好評を博した反面、戦後だけに特化していることや、より深く広島を学ぼうとするものには、少々物足りないという課題があった。また、被爆者の高齢化や被爆体験の風化に対する危機感が強まっている今、被爆の実相を後世に伝え、特に若い世代に理解を深めて欲しいとの思惑もあった。

そこで、今回の被爆 70 年史は、広島を学ぼうとする初学者にも参考となるよう、写真や図表を盛り込みつつも記述に重点をおくこととした。また、明治期の広島市の歩みから始めることで、1945 年 8 月 6 日で断絶するのではなく、その前後に連なる歴史があること、そこに暮らす人々の生活があることを実感してもらうことにした。被爆前の広島を知り、イメージすることができれば、より理解が深まると考えたからだ。

という心意気で開始したものの、当市は市史編さん室を常設していないこともあり、当然職員には編さん事業の経験はない。また、被爆 50 年の際には市民から多くの資料提供を得られたということであったが、この度も広報紙等で呼びかけたものの反応は今ひとつであり、20 年の歳月の重さを感じられた。

そうした中でも、大きな成果といえるものとして、『平和記念都市ひろしま』という映画の再発見がある。当館では以前からそのシナリオを所蔵していたが、映画自体は完成せず、フィルムも残っていない幻の映画と思われていた。その幻の映画フィルムを監督の秋元憲氏が自宅に保存していたことが判明し、市史編さん事業の一環として複製フィルムを作成して市内及びゆかりの地ハワイでの上映会まで行うことができた。幸運なことに、ちょうど被爆 70 年史発行の計画が持ち上がりとうとする時期とフィルム再発見が符合して可能となった出来事だった。その経緯については、当館紀要 30 号「世界へ訴える占領下の広島復興（その 1）ー占領期における広島発信の試み～映画『平和記念都市ひろしま』ー」を参照いただきたい。そして、今回の市史では新しい試みとして、活字離れといわれる若い世代にも受け入れやすいよう映像編 DVD を作成し附属した。映像編には、この映画が幻となったいきさつをドキュメンタリーとして収録しているので、ぜひご覧いただきたい。この映画再発見のおかげで映像編が単なる通史にとどまらず、オリジナリティあふれるものとなったといえるだろう。

編さん期間は 4 年とはいえ、原稿が提出されてからの本格的な編集作業は最後の一年。総勢 27 名にわたる執筆者から、それぞれ時代も分野も異なる原稿が次々と送られてくる。それを校正しつつ、出典資料を探し出し事実確認を行っていく。頭を切り替えるだけで至難の業である。全ての原稿が期限どおりに提出される訳もなく、出典・事実確認作業、監修委員会を経て修正依頼、再チェックと印刷用原稿の作成、完成に向けての校正といった作業が錯綜し、收拾がつかないまま走り続けているような状態であった。冒頭に“なんとか無事に”と書いたのは、そうした事情からである。

実際、この出典・事実確認作業には相当の労力を費やした。一つ一つ資料や文献、当時の新聞などから根拠を探し、以前の市史等からの単純な孫引きにならないよう細部にわたり裏づけをとった。また、最近では「平和学」といった分野に力を注ぐ大学等も増え、ヒロシマに対する関心も高まっている。そうした流れを踏まえ、これまでの市史刊行以降に積み上げられてきた様々な研究や論文から新しい知見を取り入れることにも力を入れた。さらに、占領期や海外移住など、これまでの市史において、あまり取り上げてこなかったテーマについても、海外や国立国会図書館などで調査を行い、新たな視点を盛り込んだ。こうしてファイリングされた資料は膨大となったが、当館の今後のレファレンス等にも役立つと思う。

しかしながら、振り返ってみて反省点はいくらでもある。例えば、市販のレイアウトソフトで自前で版下を作成すれば経費も抑えられると見込んで、印刷原稿までを事務局で作成したのだが、提出された原稿をすぐさま完成形に近いレイアウトにすることができ、分量調整には非常に便利であった反面、容易に修正できると思うあまり、ちょっとした気づきのたびに修正の手を入れてしまい、結果的に時間を無駄にすることも多かった。やはり、版下を作成した時点で一度区切り、今後は修正もままならないぞという心構えで望むことが必要だと思う。

索引の掲載は時間的に難しいと当初から断念した。別途インターネットで配信することとして、現在鋭意作成中であるが、やはりこれは編集作業と並行して行うべきであったと痛感している。文章で読むと違和感なく読み進んでしまうところでも、索引語を抽出するという作業を通してみると、よりの確かな言葉で示すべきだったのではないかと、小見出しなども具体的な単語で示すべきだったのではないかなど、この作業を通して気づかされることがあった。

当館では被爆 70 年史編さんを機に、デジタルアーカイブ・システムを構築し、所蔵資料のデータベース化に取り組んでいる。冒頭でも述べたように、当市には常設の市史編さん室がなく、これまでの市史において収集した資料も十分に整理されているとはいえない状況があった。その反省を踏まえ今年度いっぱい事務局を残し、引き続き資料整理を行っている。その作業の中で、こんな資料もあったのか、これも活用できていたらと残念に思うことが多い。継続した資料整理がいかに大切かを改めて感じている。

全て自分たちの力不足、準備不足ゆえで恥ずかしい限りだが、ここに書き残すことが次の市史編さんの折に少しでも参考になればと思う。

最後に、この被爆 70 年史編さんにあたり、ご協力いただいた方々に感謝の言葉を伝えたい。映像編では 10 名の方々に、様々な角度から被爆とその後の復興について語っていただいた。こうした貴重な体験談を後世に残すことができたのは、大きな成果であると思う。また、執筆者の方々にとって頼りない事務局であったことと思うが、辛抱強くご指導いただいたおかげで刊行することができた。そして何より、この長期間私たちの試行錯誤に辛抱強く付き合い、無理難題にも果敢に取り組んでくれた臨時職員の支えなくしては、到底刊行にこぎつけられなかった。忙しい中でも何かしら面白さを見出し、興味を持って取り組んでくれる彼女たちにはどれだけ力をもらったか、感謝してもしきれない。

おそらく次の市史編さんは被爆 100 周年。そのころには技術も進歩し、もしかしたら紙媒体での出版ですらないかもしれないが、この被爆 70 年史がそのときまで広島市の歴史の定本として足るものであり続けることを願っている。